

FADO

35

Julho 2002

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL

月田秀子の昨日、今日、明日…

<4月21日 北海道江差>

「(ソイソイ) 鴉の(ソイ)なく音に(ソイ)ふと目を(ソイ)さまし(ソイ)
あれが(ソイ)蝦夷地の(ソイ)山かいな(ソイ)」

江差追分で知られる江差でのコンサートは、私の積年の夢だった。波の
まにまに、風にちぎれて聞こえてくるような歌声だ。スピーカーから流れる
江差追分を聞きながら、われわれミュージシャン総勢4名と北海道ファド
ファンクラブの村上、千田両女史は「にしんそば」をすすった。京都の
にしんそばのルーツは、ここ江差にあるという。

「江差は日本一強い風が吹く町」五木寛之氏の紀行文の一説を思い
出したのだが、函館から江差に入った私たちを向かえたのは、青く澄み
渡った空と、その下に広がる静かな海だった。その風を、「たば風」とい
うらしいが、江差追分は、その日本海を吹き荒れる「たば風」に向かって
歌うことによって磨かれてゆくという。

コンサートは、木村香澄さんの、江差ブルースで幕を開けた。若干まだ
27歳の彼女は、10年前の第29回江差追分全国大会の優勝者だ。
張り裂けんばかりのビブラートのかからないストレートな高音が、胸に突き
刺さるように入ってきた。「こりゃこりゃ声ではかないっこない、負けないのは
年だけだ。しっとりじっくり歌うとするか」と心に決めてステージ上がった。

コンサートを終えて、CDにサインするために会場ロビーに出ると、サイン
待ちの人たちの列ができていた。「江差追分」という素晴らしい郷土の
歌を持っている人たちが、私のファドを心に持ち帰ってくれる。求められた
握手の手の平に感動が伝わってくる。

打ち上げでは、「江差蟹」、イカ、近海マグロ、次から次へと手作りの郷土
料理が運ばれてくる。今回初めて加わったキーボードの石川氏は、それらを
デジカメに撮るのにおおわらわだ。大阪にいる家人や、ミュージシャン
仲間への「みせしめ」土産だという。

亭主の尺八をバックに、女将が「江差追分」を歌ってくれた。気取りの
ない枯れた声だった。続いて、店主の息子がやはら尺八を吹きだし、コン
サートで一緒だった木村香澄さんの「江差追分」が、店内に響き渡った。
高音で伸ばす声に、モンゴルのホーミーが重なった。江差のルーツ説の
一つに、モンゴルがあるのもなすけた。それぞれの「江差追分」づくしで、
私の胸は一杯で、出された「江差蟹」の足を一本食べるのが精一杯
だった。今思うに返す返すも悔やまれる。

二次会、ツアーの時は、体調を考えて、ほとんど参加しないのが常なの
だが、今回は、どうしても顔を出したかった。きつと「江差追分」が聴ける。
そんな期待に応えてくれたのが、第六回大会の優勝者、青坂満氏だった。
私は彼の隣に押しやられ、特訓を受けることになった。声の高さが余りにも
高く、手も足も出なかったが、すぐ隣で聞く声に、いわゆる地声で歌うヒントを
もらったような気がする。口は大きく開けず、のどを開かず、丹田に力を
入れ、声を絞り出す。それは、五木寛之氏が、再三言われていることと
重なり、ファドの発声に通じるころもあった。まさか、異国の地で、ファドの
発声を楽しむとは、思いもよらぬ出会いに、感謝の念で一杯になった
心を携え、翌日、小樽へ向け、江差を後にした。

<4月23日小樽>

小樽ヒルトンホテルでのディナーショー、今回の北海道ツアーの最後を
飾るにふさわしく我々ミュージシャンが最高のノリで、最後の曲「カルーン」の
クライマックスに差し掛かったとき、「ボン」という不吉な音を聞いた。音響の
ヒューズが飛んだのだ。会場をぎっしり埋め尽くした299名の聴衆は、
それでも身じろぎもせず聞き入っている。アンコールの拍手の中で、「よし、
あれでいこう」と圭ちゃんが落ち着いた声で言った。私はステージを下りた。
振り返ると、圭ちゃんがステージの階段に腰掛けてギターを弾きだした。
「旅の終わりに」だ。

客席は、300人近い人がいるとは思えないほど、水を打ったように静まり
返っている。思いつき低いキーで歌っている私の声は、後ろのほうまで
届くはずがない。それでも人々は、ざわめかず、聞き入っている。聴衆は
私の心の中にいた。そして、私は聴衆の心の中にいた。歌う側と聞く側が
一つになった3分間余りの時が過ぎ、歌い終わった瞬間、会場を拍手が包み
込んだ。初めての体験だった。主催者側、音響関係者にしたら、大失態
なのだが、ヒューズが飛んでくれたことに、私は心ひそかに、感謝した。

サインをする私の耳に、「最後の歌が、素晴らしかった」「生の声が
聴けてよかった」という声が飛び込んできた。災い転じて吉と成す。何が
素晴らしかったのか、それは、会場にいた人たちの「聞きたい」という切なる
思いなのです。299名のありがたい聴衆を心に抱きしめながら、1週間の
北海道ツアーを思い出しながら、深い眠りに落ちていった月田でした。

<雑感>

ファドクラブの会員の平均年齢は、多分50歳をゆうに越えていると思う。
仕事をリタイアして、生き生きと生きている諸先輩に出会うたびに、年を
重ねてゆく勇気をいただいている。

奈良で観光ガイドボランティアをする油谷氏(先日は、彼の案内で奈良・
薬師寺の平山郁夫の壁画、唐招提寺開祖の鑑真和上像、東山魁夷の
襖絵を観てきた)、大好きなタンゴ、シャンソン、この前は、ファドまで歌い
始めた人呼んで映画評論家高島氏しかり、おたすけマンで、ヨットマン
森森氏(体調不調の時はいつも相談に乗ってもら)、料理畑で引っ張り
だこの佐田氏(昨年の高津神社のライブの時には、ポルトガル料理を
作っていただいた)、インドへ行ってしまった小西氏(金はないけど、身体は
いつでも空いているからといってくれた)、自称「天下の徘徊人」津村氏(よく
ポルトガル関係の研究資料を送ってくれる)、神戸の水先案内人辻氏
(彼の一声で、9月の神戸・長田でのコンサートは決まった)、京都の巴里
野郎のマネージャーとして好評を得ている平井氏(彼の謡曲のついで、
9月京都・大江楽堂を借りてのコンサートが実現)、蛇足ながら福島県に
住む私の父は、パソコンを始めた(庭に咲く花々の写真を息抜きにと、
メールで送ってくれる)。きつと私の知らないところで「わが道を行く」人が、
まだまだおられるのだろう。

「50歳過ぎてから、やっと本当の歌が歌えるんだよ、君はこれからだ」
五木寛之氏にそう叱咤激励されて一ちなみに彼は今年9月30日(石原
慎太郎氏と生年月日が同じだそう)に古希を迎えられる一私は、歌い手
としてのスタートラインに立つ。人生を仕切りなおす。

ファド

— 月田秀子さんに捧げる —
中井不二男

究極の哀しみというものが
もしこの世に在るとしたら
少し泣かせて欲しい
泣くことができれば
少しは悲しみも和らぐだろう
ポルトガルギターが奏でる旋律に
凍りついた孤独もやがて解け始めるだろう

泣くことが許されないからこそ
遣り場のない悲しみを
漣のように押し寄せるギターの旋律に預けることになる

宿命の女は
自転車のペダルを踏むのが好きだという
自転車のペダルを踏みながら
何の前触れもなく眩しが唄になり
その歌声が
はらはらとこぼれて行くことに
至上の快感を知るのだろう

こうしてギターの旋律に乗るはずの純粹な想いが
咽喉もとにこみ上げて来るのを待ち続ける

幽かな月の光が照らし出す波間に
艇に乗って海へ漕ぎ出すのを懼れない
漂っては消え、消えては漂う哀しみが
やがて
胸元に手を合わせる祈りとなって行くのを待ち続ける

闇の中から祈るような眩しが洩れてくる
嘎れた声
断末魔の声
溜めていた息を吐くような調子で歌い始める
それは唄ではない
どうにも止めることの出来ない嘆息なのだ
疼き・リフレイン
歌声は旋律となり
千切れて空に鏤められ
楡の紅葉にその色を映しながら
もっと遠くへと爰の空を伝わって行く

貌を上げると
祈るように歌い始め
顎を回すと
房々した髪がはらりとこぼれ
それこそが私の中のファドだという

私のファドは
いつも誰かに捧げられていることを
知って欲しいと訴えかける

かぐわしき葡萄酒を荒野に注ぐならば
月を孕み
野に嘔吐する

独りでは生きられない
語ることができるうちはまだ半端な哀しみである
歌ってこそ本当の哀しみである
訴えたい悲しみが次第に膨らみ
溢れるから唄になる

それでいて
極めつけの悲哀を歌うことはほとんど不可能である
許される静寂が曲の途中に挿入され
叫びが生まれ
胸が痛くなるのだ

闇、救いようのない闇の中から歌い始める
失った心を取り戻す術さえ奪われてしまった時
御身は海でおぼれるようにファドの中で溺れてしまうだろう
抜け殻になってしまった御身の肉体は
祭壇の前に跪き
ひもじさと寒さの中でむせび泣く

透明な狂気を
哀しみに変える秘密を教えて欲しい
そうすればこびりついて離れない孤愁を
解き明かすことができるかも知れない

その秘密は
ギターの奏でる旋律の
最終節にあるような気がする
あの柔らかに跳ね上げるような終わり方に
出逢ったとき
私はどれほど驚かされたことだろう

絞り出す悲哀は
遠い記憶になってファドの魂になり果せる

月田秀子 様

中井不二男

深夜、ひとり月田秀子さんのFadoleに聴き入っておりますと、どうにもならないほど高ぶってまいります。その意識の流れをそのまま文字に写し取ってみました。ちょうど、ブルースがドゥビシーの曲を文字にしたのと同じように…。その極限まで追いつめられた悲痛な哀しみを、いかなる救いの手をもはねつけるような厳しさを、それでいてどこかでその運命に甘えるような弱さを感じ取っています。人間であることの哀しさ、欲びを追い続けることの難しさ、果てしなき挑戦に私も参加したいと思っております。

■ 大変ご無沙汰しています

日が合わず月田さんのステージを見に行けない切なさだけが残ります。

なくさむる君もありと思えどもなほ夕暮れはものぞかなしき
(和泉式部)

…そんな毎日を暮らしております。

何かに追われて何かにおびえて
どこかに自信という言葉を書き忘れてしまって
自分が一体なんなんだろうとそう自問自答しながら答えさえも
見つけられず
時ばかりが自分を追い越していくようなそんな感じです。

生活のため自分の何かを捨てて生きているもの
どこか納得も出来ず一体何が出来るんだろうと思いつつ。
どうしても捨てきれない何かに動けなくなっている自分を口惜しく
思いながら。

いつも頂く会報のなかにある秀子さんの思い…
静かで熱いその思いをいつも支えています。

素適な月田さんのファドの非力なファンではありますが
月田さんのファドにしかない哀愁をいつももって歌い続けて
くださいね。

夕暮れの空に浮かぶ変化する月に古の思いを託して…

未だ答えも出ず浮き草していますが。
ファドのなかに思いにかぶる何かがありますね。

近いうち必ずライブ会場に行こうと思っています。お会いできる
ことを楽しみにしています。(大阪/H.N子)

(「さびしい人格が私の友を呼ぶ、わが見知らぬ友よ、早くきたれ…」
萩原朔太郎の詩集「月に吠える」の一節をふと口ずさみながら、読ませて
いただきました。今度会えたら、静かに酒を酌み交わそう。何も言わず
ともよし。)

■ 「シャンソニエ巴里野郎」にて

先日京都の「シャンソニエ巴里野郎」というライブ・ハウスに、
月田秀子さんのライブを聴きに行きました。私にとっては、昨年の
「大阪ブルーノート」以来の彼女のライブでした。

こちらはオーナーの宮本さんという方が、かつて訪れたパリの
シャンソニエ「オー・ラバン・アジル」の雰囲気感銘を受けて、17、
8年前にオープンされたお店なんですね。

その「月田秀子」さんのライブなのですが、皆様ご存知のように、
マイクなしの生演奏、ギターとギターラ(ポルトガルギター)だけの、
シンプルですが豊かな音色をバックに、少しハスキーで低音気味の
アルトの彼女のヴォーカルが、静かにそして時として激しく聴こえて
くる、実にシットリとした大人の雰囲気、哀愁に満ちた素晴らしい
ファド・ライブでした。

この日のレパートリーは、ギリシャの歌、イタリアのカンツォーネ、
アルゼンチンのユバンキの歌、そして勿論ポルトガルのファド、オハコの
「暗いはいしけ」、私の好きな「難船」「涙」などがありました。今回は
残念ながら、昨年の「大阪ブルーノート」で感銘を受けた曲の中の
ひとつである「生きてりゃいいさ」はありませんでしたが、五木寛之氏
作詞の「汽車は八時に出る」(作曲ミクス・テオドラキス)が素敵
でして、こんな悲しい歌はないのではと思え(五木寛之氏のお言葉を

お借りすれば「暗愁」というそうです)ある方のお言葉をお借りする
ならば、それこそほんとに落ち込んでいる時に聴いたら、後戻り
出来なくなりそうな、あとは、ほんとに八時に出かけるしか道は
なさそうな、そんな気持ちになりますね。

大きなステージでも、小さなスペースのライブでも当たり前と言え
ば当たり前なのでしょうが、同じエネルギーと密度の全身全霊精魂
込めたと見えるヴォーカル・パフォーマンス。それをハダハダの距離
で身近に味わえる、まさにライブ、生の魅力ですね。月田秀子さん、
有難う。(大阪・坪倉謙之)

(坪倉さん、9月の京都大江能楽堂でのライブ、宮沢賢治とファドとの
3度目の出会い、演出よろしく頼みます。)

■ 心しなやかに生きていこう

先日、大好きな五木寛之さんの講演を聴く機会に恵まれました。

ライブミュージアムと名付けられたファオーラムは、五木さんの講演、
幻冬社の見城徹さんとの座談会、そしてファド歌手、月田秀子さんの
ライブの三部構成でした。講演はもちろん、座談会の軽妙なおしゃ
べりもライブも本当にわくわくしました。月田さんの歌われたポルト
ガル語の歌詞は全く理解できませんでしたが、せつなさの中に
生きる力のようなものを感じ、聞き入ってしまいました。

講演の中で、特に印象に残っているのが「こころしなやか」と
いう言葉です。五木さんは去年のテロ事件以降、ずっと憂うつな、
つまり心がなえる日々が続いているそうです。でも、心がなえる人、
暗愁を知る人こそ人間らしい思いを持ち、生きる力を持つことが
できる、と彼は言うのです。

「こころがなえる」は、「心がしなう」につながり、「心しなやか」に
なれ、そういう心を持った人は、強風に倒れる大木ではなく、どんな
強風にもしなうて決して倒れることのない草のような強さを持って
いる、と五木さんは言っています。

今まで私は、いつも元気でいなければと思う気持ちが強くて、
心がふさぎそうになると、「こんなことではいけない」と必要以上に
自分を叱咤激励してきたように思います。でもこれからは五木さんの
ように、ふさいだ心をそのまま受け入れ、素直に認めていく自分でも
ありたいと思っています。なえる心を大切に、心しなやかといきたい
ものです。(高知/O.S子)

(高知新聞6月13日付「声ひろば」より転載させていただきました)

■ この前の「きまぐれライブ」、最高でした。毎年毎年どんどうまく
なり(プロに向かって失礼)この先10年もすればどんな歌手になる
のか、もう想像出来ません。

幸せになってはいけない歌い手と言う話がありましたが、ショック
でした。心のどこかでそうかも知れない、と言う声が聞こえてきそう
で悲しかったです。

貴女の声を初めてラジオで聞いた日に電話でCDを注文したとき、
まさか本人が電話に出てくるとは思わずドキギマギしたものでした。
芸能人のことはなんにも解らなかつたもので、雑用は事務所の人が
すべてやり、歌手様はおっちゃんしてるだけかと思ってました。
今までのタブーをぶち破り、貴女には心豊かな陽気なファド歌い、
になつてもらいたような気がします。本当に不幸なら聞く人はきっと
落ち込んでしまう、そう思いませんか、何にも知らないのに生意気
を書いてしまいました。ごめんなさい。(奈良/U・S)

fados canções

私のファド

訳詞：Caldo Verde

歌うことは私のまことの定めです
ああ 悲しみと愛を心に抱いて
私は荒々しく時にやさしい海のように
そしていつも歌声を響かせています
人びとを港に導く風の歌を
誘い込むような海の精の歌を
あるいは海の藻くずとなった船乗りの歌を
ああ どれほど多くの叶わぬ望みを
私は歌い 海は歌うことか

私の定めなのです
もはや私ではないのです
ある人の運命を歌うとき
その嘆きは 私の嘆き
歌う痛みは 私の痛み

私の定めなのです
もはや私ではないのです
ファドを歌い上げる私の声に
痛みと共に失われた
愛しいものたちの魂と情感を授かるのです

FADO MEU

Letra : Leonel Neves
Musica : Antonio Mestre

Cantar é o meu fado verdadeiro
Ai com mágoas ou amor no coração
Sou como o mar selvagem ou fagueiro
Mas sempre a entoar uma canção
Do vento que conduz a gente aos portos
Das sereias a chamar
E dos marinheiros mortos
Ai quantos desejos mortos
Canto eu e canta o mar

É fado meu
Já não sou eu
Se canto o fado de outra vida
É meu aquele pranto
É minha a dor que canto

É fado meu
Já não sou eu
E a minha voz na fado erguida
Dá-me alma e modos
De irmão de todos que a dor perdeu

<Caldo Verde主宰の清水茂美さんからのお便り>

ポルトガル、結構強いのに今日は韓国に負けてしまいましたね。にわかサッカー熱は上がる一方のこの頃ですが、韓国のサポート振りは、あの赤いTシャツにスタンドが埋め尽くされて凄みがあります。
Caldo Verdeの堀切さんと柳瀬さんは、最近早稲田大学でポルトガル語の講座をお取りになって張り切っていらっしゃいます。だんだん蒸し暑くなる日本列島に留まられないのかもしれませんが、どうぞご自愛を。

ficção

読切連載

秀子のエピソード帖 一 秀子の勲章一

内間 天馬

今から数年前のこと。「秀子さん、めちゃくちゃカッコええ男を紹介しましょうか」「ええ、是非!」

その男はトランペットを吹いていたんです。大きく目を見開いたまま、身体は微動だにしません。Jazzの歴史を変えたそのクールなサウンド。やがて自分のソロを終えると、男はスタジオの隅に赴き、煙草に火をつけ、白いワンピースを着たビリー・ホリデーに話しかける。演奏スタンドでは新人のジョン・コルトレーンのテナーサクスが熱くほとばしる。他のメンバーのソロが終わると、男は再び自分の位置にもどり、主テーマのエンディングに入る。相変わらず目は見開いたまま、そして身体は動かない……。簡単なスケッチと打ち合わせ、まともなりハーサルを省いた緊張感を完全に統率するクールな帝王。1958年、ニューヨーク、CBSスタジオ、男の名はマイルス・デヴィス。

相変わらず男運がないと嘆く秀子女史に、僕は、今は亡きマイルス・デヴィスを紹介したのでした。ただし記録ビデオで。だって、カッコええでもんねえ。ふつう、トランペッターはイメージネーションを得るためか、目を閉じる方が圧倒的に多いし、演奏が佳境に入り高音部を発するたびに身体をのけぞらす方も少なくありません。直立不動の東海林太郎だって目ぐらい

閉じますよ。つづいて観ていただいたのが、故バド・パウエルの1957年の演奏ビデオ。この狂気のコピスト、これまた身体をまったく動かさないんです。目は中空を睨んだまま、いっさい鍵盤を見ない。動いているのは腕と指だけなんです。キース・ジャレットっていう当代の人気ピアニストとは好対照ですわ。この人の場合、椅子から頻りに立ち上がり、腰をくねくねしながらピアノを弾くんです。まるで、今にもオシッコが漏れそうな感じで……。バド・パウエルの生の演奏を聴いたことのない僕としては、このビデオで彼の演奏スタイルを観ることが出来、感激しました。かつて彼のLPを68枚も集めたことがありましたから。

さて、LPやCDからは演奏風景やスタイルを想像することは出来ますが、実際には見えませんよね。秀子さんの場合はどうでしょう。師匠の故アマリア・ロドリゲスさんはあまり動きませんが、彼女も動かないほうでしょう。彼女の歌をCDでのみ聴いてらっしゃるファンの方も多いと思いますが、まさか山本リンダやピンクレディのような激しい動きを想像することはないですよ。だけど、ファドの激しい情念の痕跡は、しっかりと彼女の顔に刻まれています。眉間を縦に走る二本のしわ。彼女が初めてCDを出した頃、このしわはありませんでした。お歳のせいでは断じてありません。歌っている時の彼女の顔を見れば一目瞭然です。マイルス・デヴィスの唇には、はっきりとトランペットのマウスピースの跡があります。したがって、この眉間のしわは彼女の勲章ではありますまいか。

秀子さん、今年のリサイタル、双眼鏡持参のお客さんが増えまっせえ!たぶん……。

ensaio

きうぴいライブレポ

今回大阪ブルーノートでは2回目という、ライブ自体は8回目の気まぐれライブ。気まぐれってんだから気のままに書くのが一番だからそうさせていただきますが、そうするとまたまたとんでもなく長くなりそうなので、今回は簡潔に。

月田秀子気まぐれライブVOL.8

開催:大阪 2002年5月26日(日) 大阪ブルーノート

老若男女200名が取り囲むステージの真正面のカウンターに座り、ふと考えた。友達に誘われて来た人、繰り返し今日も一人足を運んだ人、ふと考えることあってやってきただろう人、あるいは演奏者たちのいろいろな関係の仲間たち。彼らはここに何を求めてやってきたのだろうか。そして心に何をたずさえて帰っていくのだろうか。では自分はいえど?聴きたいからだ。来たかったからだ。見逃したくないから、生で聴く歌を、演奏を、自分の時間に刻みたいから。ただそれだけ。それが東京であろうと大阪であろうとポルトガルであろうとも。同じ思いは二度とできない。同じ自分はいない。だから足を運ぶのだ。月田秀子は、ライブとは何かを様々な意味で考えさせてくれる歌手である。

今回も昨年のコンサート同様、第一部はファド、第二部はファド以外の歌中心に展開された。率直な感想をいうと、非常にムラのあるステージであった。が、結果的には成功だったと思う。気まぐれライブってんだから。

この「ムラ」というのは、曲の出来不出来の差というのではなく、気合と気迫が合致したものと合致しなかった曲の差が大きかったということである。または、完全燃焼と不完全燃焼というべきか。といっても、昨年のはビデオしか見ていないが、大した進歩だと思う。第2部はほとんど完璧に近かった。客席も正直なもので、なんとなく一部が終わってくすぶっていたものが、終わりにはえらい反応のよさで、確実に何かをつかんで帰る、満足した顔があった。

月田秀子はMCでファドに対しての迷いを少々語ったが、第一部のステージは迷いそのものであった。それは「ポルトガルにもう行きたくない」と彼女に思わせた心境の変化からなのだろうか。彼女にとってのファドは、形が変わるのか、それとももとに戻るか。ファドに縛られつつも同時に解き放たれながら、確実に先へ進んでいっている何かがある。自身のファドが生まれるための苦しみの過程にあるのか。別の方向へ行く可能性も十分秘めていると思われるが、それでも月田秀子はファド歌手である。そういわれ続けていこう。さあその未来はいかに?

「これしかないから」という人間には、強さと哀しさがある。帰りに買った彼女のCD「私の憂い」を聴きながら、自分の心の中に、不必要に重たい羽を持ち、それをむしり取る勇気もなく飛べずにいる鳥がいるのを、感じた。

informação

- 阪神大震災から7年半が経ちますが、「くつのまちながた」は、ままならぬ復興の中であえいでいます。震災直後から、故 黒田清会長が、足しげく通い見守り続けた長田の町「シューズプラザ」のイベント広場でのコンサートを9月28日(土)3時から開催します(入場無料)。ぬくもりのある靴たち共々、ご来場お待ちしております。コンサート終了後、三宮の「サロン・ド・あいり」で打ち上げを兼ねて、ライブをします(会費4000円)。ワインを傾けながら、歌とおしゃべりを楽しんでいただけたらと思っています。
- 9月14日(土)京都・大江能楽堂でのコンサートは、troupe OCTOBER'Sの坪倉謙之氏の構成・演出、竹崎利信扮する水先案内人が、宮沢賢治の世界とファドとの出会いの現場に誘います。乞うご期待。(別紙チラシ参照)
- 年末恒例の「TSUQUIDA HIDEKO FADO CONCERTO」、今年は、五木寛之さんとのジョイントコンサートという形で開催することになりました。乞うご期待!

札幌「道新ホール」：11月29日 大阪「サンケイホール」：12月3日 東京「ヤクルトホール」：12月6日

詳しくは、夏の終わりごろご案内をお送りします。



2002.5.26 「きまぐれライブ vol.8」 大阪ブルーノートにて

<月田秀子のスケジュール>

- | | | | |
|----|--------|--|--|
| 7月 | 3日(水) | 大阪・南方「三裕の館」 | *問合せ：06-6304-1745 |
| | 25日(木) | 京都・四条河原町「巴里野郎」 | *問合せ：075-361-3535 |
| | 26日(金) | 大阪・中ノ島「朝日新聞社・アサコムホール」 | *問合せ：06-6201-8033 |
| | | <small>応募方法</small> 往復はがきに郵便番号、住所、氏名(一人1枚)、年齢、電話番号を書き、〒530-8211(住所不要)、朝日新聞アサコム「ファド」係へ。13日の消印有効。抽選200名様ご招待。 | |
| | 27日(土) | 金沢・県立音楽堂「五木寛之論楽会—日本人の情 <small>ころ</small> 」 | *問合せ：0762-60-3484 |
| | 28日(日) | 大阪・箕面「みのおFM・国際交流コンサート
300回記念ライブ」(無料) | *問合せ：0727-23-3900 |
| | 29日(月) | 大阪・心斎橋「アートクラブ」 | *問合せ：06-6212-2870 |
| 8月 | 7日(水) | 大阪・南方「三裕の館」 | *問合せ：06-6304-1745 |
| | 26日(月) | 大阪・心斎橋「アートクラブ」 | *問合せ：06-6212-2870 |
| | 29日(木) | 京都・四条河原町「巴里野郎」 | *問合せ：075-361-3535 |
| 9月 | 4日(水) | 大阪・南方「三裕の館」 | *問合せ：06-6304-1745 |
| | 14日(土) | 京都・中京区「大江能楽堂」 | *問合せ：075-341-6424 |
| | 16日(月) | 長野・居町「アグリナシエンテ」 | *問合せ：026-243-3321 |
| | 17日(火) | 山梨「アートフェスタ貢川」 | *問合せ：090-4754-7305 |
| | 26日(木) | 京都・四条河原町「巴里野郎」 | *問合せ：075-361-3535 |
| | 28日(土) | 神戸・長田「シューズプラザ」(無料)
神戸・三宮「サロン・ド・あいり」 | *問合せ：078-646-5266
*問合せ：078-241-1898 |
| | 30日(月) | 大阪・心斎橋「アートクラブ」 | *問合せ：06-6212-2870 |

<編集後記>

ルールなど知りもせず 見入る ワールドカップ
小泉さんよ、またもや点稼ぎの観戦か。開催国としての踏ん張りは、敵をなぎ倒す。知人の勧めで、トルマリン入りのクリームを使い始めた。好転反応らしいが、手、足、首、背中に湿疹。顔には出ない。余程面の皮が厚いとみえる。知人曰く、「余程毒素が一杯な体」らしい。梅雨の季節。カビるよりましか?皆さんの顔、声に思いを馳せながら発送作業にいそしみます。(月田)

月田秀子ファド倶楽部ホームページ
<http://www.fado.jp/>

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第35号
- 2002年7月1日発行(季刊:年4回発行)
- 編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒543-0023 大阪市天王寺区味原町2-10-502
- TEL&FAX 06-6765-4808